

日本社会福祉学会フォーラム 2021.2.28
「地域における子育て支援」

障がい児の 放課後支援・家族支援の現場から

NPO法人 地域生活サポートネットほうぷ
児童発達支援管理責任者

渡邊 充佳(社会福祉士)



<http://supportnet-houpu.com/>

本報告の骨子

1. 平時からの基本理念と活動の枠組み
2. コロナ禍における対応の変遷と、その基本的な考え方
3. 断念せざるを得なくなっていること
4. 倫理化する「ユニバーサルマスク」への向き合い方

本報告における倫理的配慮

- 報告内容において、特定個人の事例は取り扱わない。
- 本報告で使用する写真については、個人が特定されないよう加工する条件のもと、インターネット上での公開について保護者から許諾を得ており、実際に過去に公開済みの写真のみ使用する。

(公開資料からは写真は省いています)

法人の概要

2004年4月 法人設立

- 重度障がい児の子育て経験をもつ社会福祉士と、その志を共有する医療・福祉・教育関係者が中心となって設立
- 法人理念「つながりの中で暮らす 望まれた人として生きる 自分らしく生きていく」

活動の詳細は、本書第6章第2節をご一読ください。

【これまでの活動】

- セルフヘルプグループの立ち上げ支援
- 子育て支援団体のネットワーク形成
- 地域福祉計画策定プロセスへの参画
- 障がい児の地域生活支援プログラム開発
- 2014年1月～
放課後等デイサービス事業開始



インクルーシブな地域社会をめざして

放課後等デイサービス 楽童ほうぶ

- 小学校 1 年生～高校 3 年生の、障がいの種別・程度も様々な異年齢の子どもたちが集い、育ちあい、学び合う場
- 「福祉施設」でも「習いごと」でもなく、地域のなかの「もうひとつの家」として



楽童ほうぶにおける支援の枠組み 「こどもILP (Independent Living Program)」



体験をとおして、一人ひとりの「やってみたい！」を発見し、仲間とともに「一緒にやってみる」サイクルを積み重ねていく
「生活者」としての子ども理解に基づく「生活をつくる」支援

コロナ禍における対応の変遷①

【感染拡大期(2月中旬～3月上旬)】

- クッキング、おやつづくりの活動をどうするか協議
- ゼロリスクの観点に立てば、新型コロナウイルスに限らず様々な感染症のリスクはつきまとうので、実施そのものが困難
- 新型コロナウイルス感染防止のための具体的方法は、従来からの食品衛生・感染防止対策と共通する点も多い

「感染予防」と「体験の充実」の両立をめざす。

調理活動時のマスク着用・手指消毒の徹底(イラストによる行動手順の視覚化で、子どもの理解と協力を促す)、加熱調理のメニューに絞って実施

コロナ禍における対応の変遷②

【全国一斉休校期(3月上旬～4月上旬)】

- 月～土曜 10時～17時 開所
- 公共交通機関を利用する外出活動(遠足)は延期し、徒歩での遠足を計画 (→雨天のため当日中止)
- クッキング、おやつづくりは、感染拡大期からの対策を講じたうえで引き続き実施
(※各家庭からの昼食持参は妨げない)
- 「防災」をテーマとしたプログラムの企画・実施

感染症予防や防災について、子どもたちと共に学びを深めつつ生活体験を広げていく機会としてとらえ、活動の充実に努める。

コロナ禍における対応の変遷③

【緊急事態宣言下(4月7日～)】

- 保護者がステイホーム困難な家庭の子どもは、原則として希望通りの日数、受け入れ継続
- 自宅で過ごすことが可能な場合には利用を控えていただくよう依頼し、適宜連絡をとり状況確認
- クッキングは中止、昼食は持参または購入
- 屋内の換気、共用物の消毒、子どもにも可能な範囲で密を避けるよう適宜声かけ
- 午前は学校の自習課題の学習支援、午後(晴天時)は公園遊びをそれぞれ日課として設定

健康的な生活リズム・心身の状態・習慣を維持し、家庭生活の安定に資するよう、学習と遊びの支援に注力する。

コロナ禍における対応の変遷④

【緊急事態解除以降～現在】

- 来所時の検温
- エアコン使用時も窓を解放し、屋内は常時換気
- クッキングを再開したうえで、昼食時の座席配置、プログラム活動時の間隔の確保に努める
- 集団遊びのプログラムにおいては、距離を確保しながら楽しめる内容を企画する
- 季節行事も、環境設定やプログラム内容において密集・密接場面の縮減可能性を検討したうえで、原則実施

感染防止対策を講じつつ、体験の幅を広げるための活動を順次再開。「つながりの中で暮らす」「自分らしく生きていく」(法人理念) 日常の再構築をめざす。

断念せざるを得なくなっていること

- 地域における異世代交流の機会づくり
- 職場体験学習の受け入れ依頼
- 公共交通機関を活用した外出イベントの実施
- 大学生ボランティアの恒常的な協力体制

障がい・疾病の有無、世代・性別等の差異をこえて、誰もが自由に出入りでき、安全・安心に共存・交流できるコミュニティを、日常生活圏域においてどのように創造していくのか、あらためて問われている。

「ユニバーサルマスク」と障がい児

- 「マスクをすぐ外す」「マスク着用を拒絶する」行動として発せられる子どもを、どう受け止めるか？
“学校では我慢するけど、放課後は我慢したくない”
“イヤなものはイヤ”
- 「心身の解放」を希求する子どものニーズは、生き物として自然であり、かつ根源的なものである。

一律着用を求める場面を局限化したうえで、それ以外の場面については、「奨励すれども強制せず」。
各家庭との意思疎通に基づき、対応の個別性（合理的配慮を含む）を確保する。